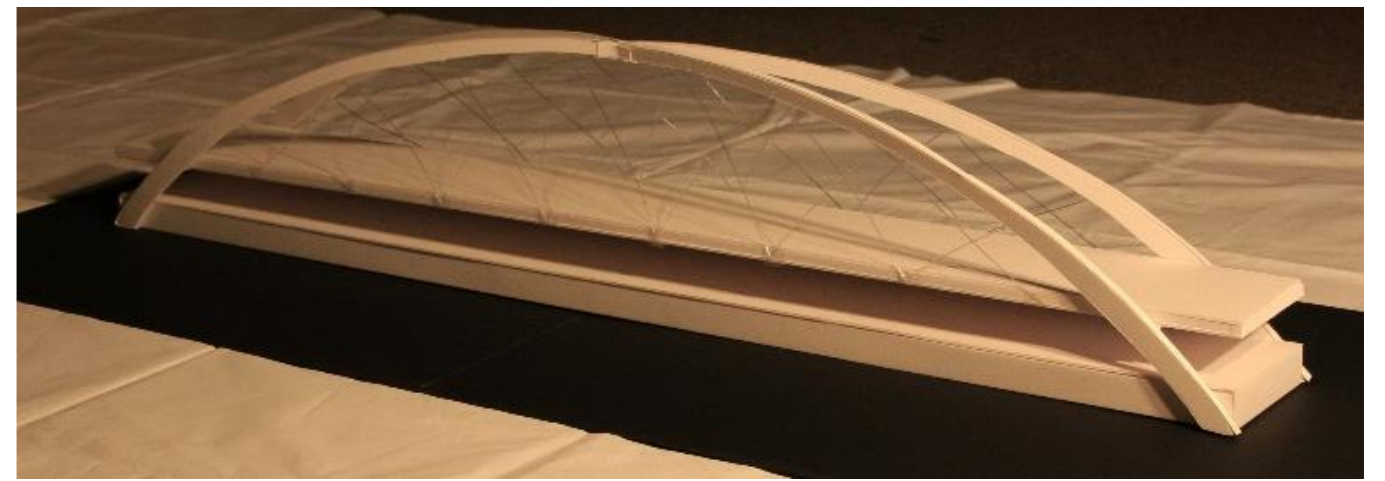


HumanLED Bridge

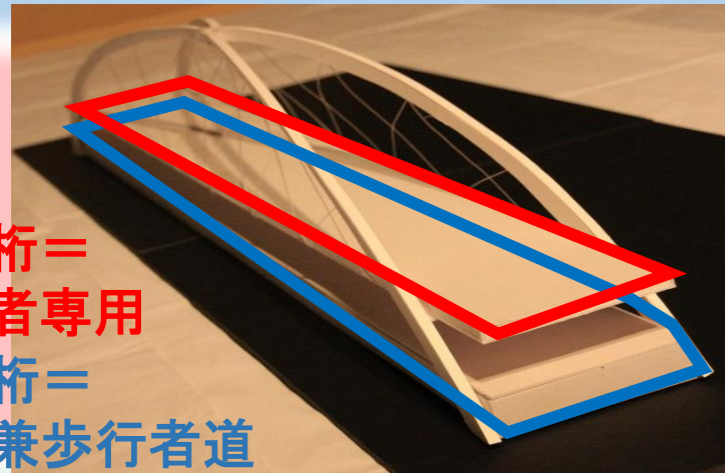
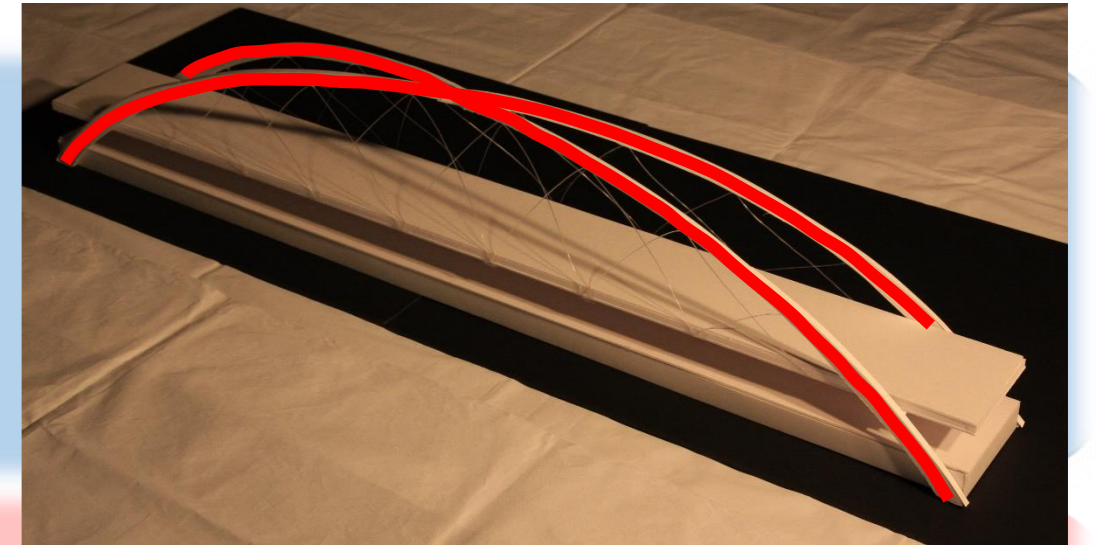
～人が導かれる橋～

オリンピックは、「人」によるスポーツの祭典である。初のオリンピックが開催されてから130年経った今でも、それは変わらない。そこで、オリンピックの原点に立ち返り、「人」に注目した、「人」が楽しめるような橋を設計しようと考えた。



1. 構造デザイン上に表れる「人」

橋の構造として用いたのは、右のような、バスケットハンドル型ニールセンサー橋である。細いアーチ部材で支持された美しい形状であることは当然だが、そのアーチの形状が、人が器械体操でいう「ブリッジ」をしている様子に似ていることから、この形状の橋を設計することとした。



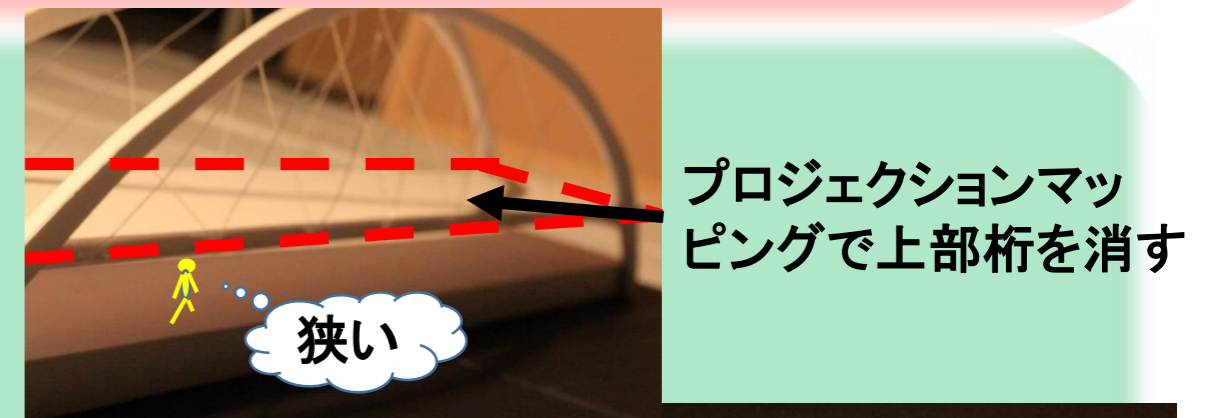
上部桁＝
歩行者専用
下部桁＝
車両兼歩行者道

2. 「人」が立ち止まる橋

橋は、それ自体の美しさや眼前に開けた景色があるにも関わらず、多くの人にはそれに気づかずにただ通り過ぎてしまう。ダブルデッキにし、下部桁を車両兼歩行者道、上部桁を歩行者専用とすることで、上部桁を歩く人は広い幅員をゆったりと歩き、車両通過のない安全性、周りの風景や橋の構造に目を配る余裕を得られる。

3. 「人」が楽しめる橋

ダブルデッキとしたことで、下部桁には圧迫感が生じる。そこでこの橋の最大の特徴である、プロジェクションマッピングを用いる。上部桁が存在しないかのような映像を投影することで、下部桁を通る人に圧迫感を与えない。この手法は、日本橋の上を通る首都高にも適用できる。また、オリンピックを通じて橋の理解を深めてもらうため、橋梁全体にセンサーを配置し、通行による橋の応力状態やたわみもプロジェクションマッピングによって映す。さらに、ケーブルや上アーチにLEDを設置することで、イルミネーションを用いた様々な橋のイメージを演出したい。



プロジェクションマッピングで上部桁を消す

狭い

応力状態を色で表現

